

国研紀要156 (2020.10):101-123

〈特集〉

大学間協定4 大学合同国際シンポジウム「東アジア文明の伝承と発展」

超高齢社会における高齢者と家族の選択

——台湾金門島珠山村を事例として

松岡 正子

はじめに

本稿は、超高齢化社会に突入した台湾金門島の珠山村を事例として、村に残る高齢の親世代が、都市で働く子世代や地域社会とどのようなネットワークを築いて「生」を全うしようとしているのか考察したものである。

台湾は、高齢化、少子化、非婚化が急速に進む国の一つである。高齢化については、1993年に高齢化率⁽¹⁾が7%を超えて高齢化社会に突入すると、2018年には高齢社会（高齢化率14%以上）になり、2025年には5人に1人が65歳以上という超高齢社会に達すると予測されている。少子化は、近年、合計特殊出生率（女性一人が生涯に産む子供の数）が1.1あたりの低水準で推移し、さらに非婚化がすすんで単身世帯が増加している。そして、このような急速な高齢化、少子化、非婚化を背景に、高齢期要介護者の増加と介護提供者の絶対的不足が一層深刻になっている。

台湾における高齢者介護の特徴の一つは、「家族介護」という伝統的な概念を維持したまま個人や家族、地域社会、政府等が様々な方法を試みている点にある。「孝」の概念に基づく、親の扶養を家族の責任とする意識は、現在もなお根強く維持されているが、少子化未婚化による家族数の減少は、「三世代同居」という理想の実現を難しくしており⁽²⁾、一方で、社会全体に

(1) 世界保健機関 (WHO) と国連によれば、高齢化率（全人口に占める65歳以上の割合）が7%超を高齢化社会、14%超を高齢社会、21%超を超高齢社会という。なお日本は、2017年に超高齢化社会に突入し、2060年には65歳以上の人口が全人口の40%に達すると予測され、中華人民共和国も2035年に超高齢化社会に突入して高齢者は3億人を超え、うち独居老人は1億人超と推測されている。

(2) 中華人民共和国においても家族介護意識は根強く、法律でも、「中華人民共和国老人權益保障法」10条に「老人扶養は主に家庭に頼り、家族が老人の世話をしなければならない」と

浸透した家族介護の意識は政府による社会福祉政策や介護の社会化を遅らせている[劉正・齊力2019]。

本稿で事例とする金門島の珠山村は、若者の多くが村を出ており、高齢化率が30%を超える老人村である。しかし、筆者が訪れた時、民国時代にタイムスリップしたような閩南式家屋に囲まれた景観のなかで、老人たちは菜園を耕し、宗祠と大道宮廟を守りながら穏やかに暮らしているようであった。

本稿では、村に残る高齢者たちと都市で働く子供たちが、根強い「家族介護意識」のもとで互いにどのようなネットワークを築き、子世代は親の高齢化に対してどのような選択を行っているのか、村という地域社会や政府はどのような支援をすすめているのか、分析する。

一、台湾の高齢化問題に関する台湾と日本の先行研究

近年の台湾の家族形態の変化について、楊培珊[2019]は、次のように報告する。国家發展委員会(2017)「106年至115年我国家庭結構發展推計」によれば、近年、単身世帯が盛行し、2015年には全世帯の11.8%になった。二人家族も2011年に四人家族を超えてトップにたち、2015年には28.6%を占め、単身と二人の家族で全体の40%に達している。しかも家族規模の縮小は続いており、2042年には一 가족の数が2人未満になると予測されている。一方、家族介護の主体者である子世代については、106年(2017)の高齢者状況調査によれば、55歳以上で子供をもつ者は減少傾向にあり、子供と親との同居も減り続けている。一方で長寿化によって65歳以上で日常的に介護が必要な者は28.2%に達しており、その介護にあたる者は、家人の場合が67.1%と最多であるが、外国籍介護者による場合も27.2%を占め、5.7%は介護をする者がいない[楊2019: 28-29]。これは、家族介護意識の根強さを示すとともに、要介護の親をもつ子供が、三分の二は「同居型家族介護」を選択し、三分の一は、日常的ケアは外籍介護労働者が代

し、憲法45条では公的扶養に関して「中国公民は高齢、疾病、労働能力の喪失時に国家と社会から物質的援助を受ける権利を有し、国家は公民がこれらの権利のために必要な社会保険、社会救済と医療衛生事業を發展させなければならない」と規定している。しかし「空巢家庭」(子や家族と同居していない高齢者世帯)は都市部農村部とも50%を超えている。

替し、経済的負担を子供が担う「別居型家族介護」を選択していることを表している。

台湾における高齢化に関する研究は、「期刊文献資迅網」によれば、2005~2020年は毎年平均20~30本ある。テーマの内容は、数量では第一に経済、第二に医療・健康、第三に高齢者自身の学習や娯楽活動、第四に社会福祉制度や法制度関連で、イギリスやドイツ、日本、シンガポール、中国などの情報も紹介されている。このうち経済では、介護器具や民間のケア施設運営等の高齢者関連の企業に関するものだけではなく、高齢者自身の年金や保険、個人資産の運用、就業など経済的自立を促すものが少なくない。総じていえば、多くの論説が家族介護を前提としたうえで、高齢者自身の経済的、日常的、精神的自立を促し、政府や地域、企業はそれを援助するという方向を示している。介護扶養の社会化については、その必要性はのべられているものの、民間参入を含めたケア施設の設置運営や人材訓練に関するにとどまっている。また、「外籍看護工人」（外国人介護者）や新移民による人力の供給も論じられているが、外国人看護関連労働者の権利等についてはあまり問題にされていない。

本稿のテーマである家族の変化と高齢社会について論じたものは、あまり多くないが、楊培珊（2019）「我国面对人口與家庭結構變遷下的高齡社會議題與解方」は、この問題の背景、現状、今後の課題を整理したものとして参考になる。楊論文では、まず、少子高齢化や労働力減少、家族構造の変化について分析し、次に、今後の指針として以下の3点を提起する。第一に、国民はあらゆる年齢の者すべてが、高齢時の心身の健康に備えて自己への投資を始めなければならない、第二に、高齢者の経済的自立のために、その雇用を促進し、専門部署や法律を設ける、第三に、台湾では家族規模の縮小にもかかわらず、65歳以上の三分の二が二世代あるいは三世代、四世代で暮らしており、個人においては民法に規定された家族扶養を遵守し、社会においては「尊親孝親」意識の浸透が明らかである。よってこのような個人と社会における家族の価値観を強固にするために、以下を提案する、①家族に対しては、構成員個人の自主的決定を尊重する、②企業に対しては、仕事と家族介護の両立のために介護休暇の承認、職場による幼児と高齢者のデイケア施設の設置、介護費用援助の実施を求める、

③政府に対しては、家族介護担当者の正当性を明らかにするために介護現金給付制度の設置をもとめる、④地域に対しては、65歳以上の高齢者家庭への介護サービスを増やす、とする。

楊論文は、家族介護を前提とした指針の提起であり、台湾の政府と世論を代弁するものといえる。しかし家族介護の限界が認識されているにもかかわらず介護の社会化という視点がほとんど示されていないため、政府や地域の方針と施策が十分に論じられていない。

これに対して、日本における台湾の高齢化研究はやや異なる。日本では、介護の社会化やアジアの人口移動の視点から、社会学や文化人類学を中心とした研究の蓄積がみられる。CiNiiの「台湾、高齢化」での検索結果によれば、2005年前後を境にテーマが変化している。05年以前は高齢者自身の健康や生活環境に関わるものが主であったが、以降は、それに加えて高齢者を取りまく諸問題についての論説が増えている。05年以降のテーマは、第一に社会福祉制度や高齢者医療政策、第二に民間運営の介護施設や介護機器企業など福祉関連企業、第三に外国籍介護労働者や新移民である[安里2013など]。この背景には、整備が遅れていた高齢者福祉制度が、2007年に国民年金制度が実施されたことで年金関連の論議がふえたこと、医療や介護の現場から、2000年「安寧緩和医療法」制定前後から末期ケアや認知症ケア、長期介護について問題提起がされたこと、社会学人口学の視点から、家族介護という理念を実質的に支えてきた外国籍介護労働者について、社会的位置づけや待遇改善がとりあげられてきたこと等がある。

本稿では、台湾漢族の高齢者の生活や日本と中国の家族間関係について、主に、植野[2000]、横田[2011]、安達[2010]、安里[2013]を参考にした。安達[2010]は、台湾より先に超高齢社会にはいった日本の家族形態の劇変、高齢者と家族のあり方、高齢者を取りまく社会関係資本（ソーシャルキャピタル）について現状と理論を論じたもので、示唆的である。安達によれば、日本では65歳以上の高齢者がいる世帯は、1980年に50.1%でほぼ半数を占めていた「三世代同居世帯」が、2007年に18.3%に減少したのに対して、「夫婦のみの世帯」が16.2%から29.8%に倍増し、さらに「一人暮らし世帯」も10.7%から22.5%に倍増し、すでに高齢者の過半数が、子やその家族と同居していない[内閣府2009]。また、「親と未婚子の世帯」が

増え、成人子の未婚化によって家族周期以外の独居高齢者の大幅増が予測されることを報告する。そして、この現状をふまえて家族関係を個対個の関係としてとらえ、高齢者を行為主体として高齢者と家族の相互作用によって再構築される「家庭」研究を提唱する。本稿では、これを参考に、村に残る親と村外に居住する子供たちの相互ネットワークについて考える。

二、珠山村の歴史と家族の変化

1. 村の歴史

珠山村は、台湾の金門縣金城鎮に属する。周囲を鷄奄山や亀山に囲まれた盆地に位置し、清末民国時代の僑郷期に建てられた閩南式家屋が大潭に南面して並ぶ。1996年に国立公園の一部に指定され、閩南文化を残す村として観光開発が進められている。

珠山村には、歴史的に3つの特徴がみられる⁽³⁾。

第一は、薛氏が開いた単姓村であり、すでに26代、650年を経ていること。薛氏は、族譜によれば、祖先は宋代に河南から閩南に移動し、元末(1345年)に戦乱を逃れて金門の石井坑に渡った。第三代の時に、風水に優れた珠山(亀山兜)に移って定住した[翠玉2008:90~91]。現在も、毎年、大宗祠で祖先祭祀(冬至會)を行い、清明節には、第一、二代が葬られた石井戸坑の墓前で一族による祖先祭祀行う。また4月には、大道公宮で保生大帝を祭り、金門縣内の20数か所の大帝廟も参列する。

第二は、18~20世紀半ばにかけて多くの男性が南洋に出稼ぎに行った僑郷であったこと。水田の少ない珠山では、かつて男性は結婚して子供をつくると、フィリピンなど東南アジアに出稼ぎにでた。そこには、同様にしるしに出稼ぎに行った親類たちがいた。最盛期の20世紀初頭には、出稼ぎ先から送られてきた僑匯によって珠山小学校が創立され(1917)、月刊誌『顕影』(1928, 9)が創刊されて、故郷への献金が呼びかけられた。また、閩南式家屋(最古は大宗祠1768年)が次々に建てられ、洋楼(1928年)も出現した。浅岡らの2017年の家屋調査によれば⁽⁴⁾、現存する82棟の閩南式建造

(3) 川島[2011]、謝[2008]および現地での聞き取りによる。

(4) 2017年12月28~30日、金門縣金門鎮珠山村において愛知大学現代中国学部松岡正子ゼミ

物の屋根は、馬背金型が46棟、燕尾型22棟、馬背火型10棟、その他である。このうち燕尾型は、宗祠や役人のみに許されるもので、商業で成功した村人が「買官」によって役人の地位を手に入れたものという。また馬背金型は財運を願うもので、商いを生業として村が豊かになっていったことがうかがわれる。なお、これらの建物は国共内戦中の砲撃によって一部が破壊されたものの、多くがそのまま残った。

しかし、中国本土との内戦や1970～80年代の台湾の経済成長にともなうて村を出る者が増え、空き家が目立つようになった。また、1995年に村が「金門国家公園」の一部に指定されて新築や改修が閩南様式のみに制限されたために、旧来の景観が保持される一方で、帰村しようとする者にとっては大きな障害となった。県政府は、優れた風水と閩南式建造物の景観による観光開発を進めようとして、所有者不明の旧屋をまず国有財産とし、民宿への転用を認めた。旧屋の30年間の貸借権とその経営権は公開入札によって決められた。その結果、14戸の民宿のうち13戸が外部者による経営となった。外部経営者は村内に居住することはなく、村人を雇って運営している。新しい飲食店や商店もできなかった。観光開発による直接的な利益は、村民にはほとんど還元されていない。

しかし、金門縣全体を対象とした観光開発によって、景観の修復や道路の整備が進み、金門島はリゾート地としてうまれかわった。珠山村をとりまく道路網も整備され、県城までは車で20分弱となった。しかし一度外にでて新たな家族をつくった村民にとって、帰村して村で生活することは容易ではない。親が住む閩南式の旧屋は、現存の平屋のままでは複数家族の同居には不便であり、国立公園内の建築制限によって改築も容易ではないからである。

第三は、1937年から1992年まで軍事態勢下にあったこと。1937～45年は日本軍に占領され、1949～92年は国軍10万人が金門に駐留して、珠山村にも兵隊がとどまり、中華人民共和国に対する軍事最前線基地となったことである。聞き取りによれば、島民は、初め、国軍の駐留をあまり歓迎していなかった。村内に駐留した国軍兵士は「阿兵哥」とよばれたが、母親たちは娘が兵隊と結婚することを好まず、従来の婚約等の儀式を省略して急

3年生12名が金門大学学生の協力を得て民俗調査を行った。

いで他村に嫁がせた。また、度々砲撃をうけたため、一家をあげて本島に移住する者も現われた。男たちは徴兵され、女性たちも軍事訓練を受けた⁽⁵⁾。戒厳令の解除は、台湾本島では1986年であったが、金門島では6年後の1992年であった。

2. 人口動態と家族形態の変化

薛HN（男性66歳）によれば、20世紀以降、珠山村では4回の大きな人口移動があった。一回目は、清末民国期で、男性たちの南洋への出稼ぎが最も盛んに行われた。若者は結婚して子供をつくると、親類を頼って南洋に行き、仕送りした。しかし帰国する者は半分にも満たなかったともいわれ、嫁いできた嫁は、夫に代わって農業生産に従事し、家内で祖先を祀り、家事をしながら子供を育て、夫の両親に仕え、介護を担った。村に残された家族は、多くが母と一人の子供、両親とその親という三あるいは四世代同居である。二回目は1945年の日中戦争終了後で、日本軍が敗戦で撤退して国民党の支配が始まると、徴兵を逃れて南洋に渡る男性たちが現れた。

三回目は1949年の国共内戦開始後である。金門島は、厦門まで20数キロに位置しながらも台湾に属したため、兩岸対立の最前線基地となった。度々の砲撃によって珠山でも家屋の一部が破壊され、危険を逃れて、家族単位で本島の台北などに移住する人々がでた。四回目は1970～80年代で、台湾では経済成長がすみ、労働力の需要をうけて農村から都市への人口移動が顕著になった。珠山においても、若者の多くが高校や大学等への進学や就職のために本島へ出ていき、都市で定住した。

以上、第1、2回目は、ともに帰村を前提とした男性が一時的に不在となる状態で、父系の直系家族という家族形態に変化はなく、第3回目も家族単位の移出で家族数が減少しただけである。しかし第4目回は、移出した若者は都市で高等教育を受け、働いて定住して帰村しなかったために、母村には親世代、あるいはそれに祖父母世代を加えた高齢夫婦世帯、片親のみ世帯、老老介護世帯が主となった。

なお、どの移動においても、多くが戸籍を珠山に残したまま移出した

(5) 軍事訓練については、珠山における女性に対する訓練は松岡[2019: 79-85]、金門島全体については江・マイケル[2011: 88-128] 詳しい。

め、戸籍人口は多いが常住人口はかなり少ないという現象がうまれた。2017年の場合、戸籍人口は約420人であるが、常住人口は132人で、うち確実に村外に居住する10人（男性8、女性2）がいるので、実際の常住人口は122人（36戸）である。男女比は62：62とほぼ均等で、平均家族数は3.4人である。常住人口は1996年に156人であったのが、2017年は132人に減り、20年間で24人、年間では1.2人ずつ減少している。これは、新たな誕生がほとんどなく、死亡のみによって人口減少がすすんでいることを示している。

また、2017年の常住者の年齢別分布をみると、10歳以下3人、11～20歳13人、21～30歳6人、31～40歳8人、41～50歳15人、51～60歳15人、61～70歳7人、71～80歳11人、81～90歳8人、91～100歳1人で、年齢不明48人に達する。年齢不明48とは、村内には住んでいないが、住民が家族と意識する者たちが含まれていると考えられる。親世代は、別居している子供たちの家族も自分の家族として数えることが少なくない。だとすれば、2017年の実際の常住人口は年齢の明らかな84人程度であり、その場合、20歳以下は16人で16.7%、21から60歳の労働人口は44人で52.1%、61歳以上は27人で32.2%を占める。

さらに、これらを親、子供、孫世代別でみると、戸主世代を41～60歳とすれば30人、その親世代を61歳以上として27人、子供世代は40歳以下で27人である。『薛氏宗親會106年度實録』（2017）によれば、宗親會には役員として18人が記され、大道宮會には宗親會委員以外の男性委員が12人登録されている。なお、高齢女性の一人暮らしの場合は、村外に居住する息子の名前が戸主として登録されている。村内居住のほとんどの男性が、宗親會或いは大道宮會の委員を務めている。

筆者は、2017、18年に薛氏宗親會の薛DY 董事長の紹介で、男性6名（80代1、70代2、60代1、59歳1、40台1）と女性4名（80代2、70代1、60代1）にインタビューを行うことができた。彼らの家族構成は次のようである。

[事例1] 薛永H（男性、83歳1934年生）。妻は亡くなり、独居。宗親會監事。春節と中秋節に、台北に住む子供たちとその家族が訪ねてくる。

[事例2] 薛永K（男性、74歳1943年生）。国軍が駐留していた時は「阿

兵哥」(国軍兵士)専門のタクシー運転手をした。子供は二男一女、現在は妻と二人暮らしだが、長男一家と次男一家を家族として数えており、9人家族だという。長女(44歳)は結婚して金門県城で暮らし、高校生と中学生の2人子供がいる。長男(42歳)も結婚して県城におり、子供は一人。次男(40歳)は台北の大学を卒業して台北で公務員をしており、双子の子供がいる。

[事例3] 薛祖Y(男性、74歳1943年生)。金門県文化局に勤めていた。かつては宗親會董事長等を務め、現在も珠山大道宮會委員。書道や絵画、篆刻などが趣味で、村を代表する文化人。妻と三男二女。長男(50歳)は台北で電力会社勤務。長女(48歳)は県文化局所属で図書館勤務、県城で家庭をもつ。次男の薛德M(46歳)は台北の電力会社に勤めていたが、2007年に両親の面倒をみるために一家で帰村、両親が住んでいた家屋を引き継ぎ、戸主となった。両親は旧珠山小学校の小講堂を村から借りて次男夫婦とは別居しており、週1回一緒に食事する。次女(43歳)も結婚して県城でくらし、セブンイレブンの店長。三男(41歳)は金門縣酒造会社に勤務、県城で家庭をもつ。

[事例4] 薛德M(男性、46歳1972年生)、事例3の次男。台北で電力会社に勤務し、そこで妻(45歳1973年生)と知り合って結婚したが、兄弟姉妹と話し合った結果、親の家を引き継いで面倒をみることになり、現在は県城でセブンイレブンに勤務。親譲りのリーダーとしての資質をもっていることはインタビューでもよく分かった。帰村後、宗親會董事長に選ばれ、大道宮會やその他の村組織すべての幹部である。妻と台北で大学に通う長女(19歳)、県城の中学に通う二女(11歳)がいる。妻は専業主婦、夫に従って台北から珠山に一家で転居し、宗親會などの会計を担当して夫を助けている。

[事例5] 薛海M(男性、66歳1952年生)、宗親會理事、珠山大道宮會候補監事。妻と二人の息子。長男は台北にすみ、デザイナー。次男も台北で銀行務め。妻と二人暮らし。一族は他村にいる。

[事例6] 薛永T(男性、59歳1959年生)、宗親會理事、薛氏基金会董事、珠山大道宮會委員。運輸業、金門酒造公司から酒粕を農家に運ぶ。妻と一男一女。妻は金門縣農會に勤める公務員、長男は金門港務処勤務、

県城で家庭をもつ。長女はオーストラリア留学中。現在は妻とふたり暮らし。2004年に、旧屋を閩南式と洋式を合体させた3階建てに改築。砲撃で建物が壊れやすくなっていたことと、政府が勧める閩南式では現在の生活にあわないことから、政府の制限が緩んだ時に改築した。

以上、男性たちの事例によれば、子供たちは多くが家を出て県城か台北で働いており、村に残る親世代は、4例が高齢者夫婦世帯で、1例が妻を亡くした独居世帯である。

では、高齢女性はどのような状況なのだろうか。女性たちは、同性不婚の原則に基づいて他村の異なる姓の出身である。

〔事例7〕李JL（女性 87歳1930年生）、古寧頭村出身、国民小学校卒業。

夫は亡くなり、孫（長男の息子）と暮らす。三男四女。長女（66歳）は専科卒、県城で会計主任。次女（63歳）は県城で衛生庁課長、三女（59歳）は高卒、県城で会計士。四女は大卒、台北で教師、長男は中卒、台北で働く、次男は県城で人事処専員、三男は専科卒。昼は娘たちが交代で来て昼食をつくり、一緒に食べる。夕食は孫と食べる。

〔事例8〕翁LM（女性 82歳1935年生）、盤山村出身、国民小学校卒業。

夫は亡くなり、一人暮らし。四男三女。長男は台北工業高校卒、県城の電機会社で働く。他の子供は台北にいる。

〔事例9〕翁YK（女性、74歳1943年生）、夫は死亡、二男三女。長女（53

歳）は県城で理髪店を営む。長男（51歳）は用務員、次男（49歳）は病院の調理師、次女（46歳）、三女（44歳）。長女以外は未婚。現在は未婚の子供たちとくらす。

〔事例10〕許YX（女性、62歳1956年生）、舅（94歳 歩行が困難）と姑（91

歳 認知症）とは結婚当初から同居、現在は夫を含む4人暮らし。本人は数年前から清掃の仕事をしている、夫は商売。二男一女、全員が台北の大学を卒業して金門にもどってきた。長男は役場、長女は腸詰工場、次男は高粱酒工場で勤務。

家族形態は、事例7が孫と祖母の隔世家族、事例8は一人暮らし、事例9は未婚の子供との核家族、事例10は舅姑と同居の老老介護である。事例7、9、10は家族介護であり、事例8は一人暮らしである。

以上の10例から推測すれば、村内では、すでに高齢者夫婦だけ、ある

いは一人暮らしが主な家族形態となっている。村民が家族介護を原則とし、最後まで村内で暮らすという親の希望をかなえることを当然としていることは明らかである。そこで事例3, 4, 8のように子供あるいは孫が帰村する、ただし、帰村した子供一家は同居ではなく、それぞれ村内に別に世帯をもつ。従来の閩南式家屋では二世帯同居は狭くて不便であり、改築も制限があつて難しいからだという。また、県城が車で半時間ほどの近距離にあることから、県城に兄弟姉妹の誰かがいれば、近居介護が可能であるという、家族介護を前提とした選択の一つでもある。子供のいる台北に親が移るという事例も少数あるが、親世代はそれをあまり望んでいないという。

三、家族介護をめぐる親世代と子世代の意識の変化

珠山村では、現在も家族介護が根強く維持されていることは、事例で見たとおりである。しかし、介護される側の親世代と介護側の子世代、特に「嫁」の意識は、かつてとはかなり変わってきている。以下では両者の意識の変化とその背景について検討する。

1. 自立志向の親世代

村には、一人暮らしや夫婦のみの高齢者が多い。彼ら自身は80歳代までは多くが健康で、自立した生活をおくることができる、できれば最後まで、健康寿命を長くしたいと思っている。村人はみな一族で、友人なので孤独感もあまりない。子世代は親世代では受けられなかった高等教育をうけ、都市できちんとした仕事についている、帰村して同居できればいいが、改築は難しい。県城まで戻っていれば頻繁にあえるし、台北にいても中秋節や春節にはもどってくる、自分が行くこともある。高齢者たちは、子世代と離れていても、特に息子一家との家族意識を強くもっている。

彼らの日常生活は、次のようである。男性高齢者は、毎日、大道宮廟に集まって友人たちと一緒に過ごし、宗親會や大道宮會の監事や委員を務め、伝統の祭祀では中心メンバーとして活動する。宗親會が主催する12月の冬至會や4月の清明節での祖先祭祀、4月の大道宮會での保生大帝の祭祀、1月の祈願灯の交換などに、長老男性たちの知識や経験は必須である。彼らは宗親會を中心とした活動を娯楽と精神的な支えとしている。

女性高齢者は、男性より長寿なため一人暮らしになりやすい。李JL (87歳) は、6時起床、神棚で祖先を祀る。7:30朝食、お粥が多い。最近ではシリアルを食べることもある。洗濯、書道をする。家庭菜園をする。昼は県城に住む娘たちが交代で食材や日用品を持ってくるので、一緒に昼食を作って食べる。編み物をする。昔から裁縫と編み物が得意で、若い頃は夫にミシンを買ってもらい、人に頼まれて衣類を作って現金収入にもなった。友達とおしゃべりをすることもある。発展協会が主催する学習会に参加することもある。夕方、夏は運動をする。7時頃夕食を作って孫と食べる。テレビを見る。23:00就寝。神棚の祖先を祀ることは嫁の仕事だったので今も続けており、大道宮廟にも毎日参拝する。かつての「三従」生活(夫、舅姑、息子に従う)からみれば、心身ともに楽になった。一人暮らしになって初めて自分自身のために時間を使うようになった、という。

村の高齢者は、村で今までとおりの暮らし続けることを望んでおり、子世代もそれを助けている。珠山型の高齢者自立生活様式である。この背景には、次のような条件が考えられる。

第一に、高齢者自身と家族の双方に、故郷の家で死を迎えて「善終」を全うするという伝統的な気持ちが強くあること。インタビューした高齢者はみな、これからも村にいたいことを望んでいた。鍾宜錚 [2019]⁽⁶⁾は「善終」について次のように説明する。台湾では、善終を、「天寿を全うして安らかに逝く」と「亡くなった家族に対する哀悼の意を表し、葬送儀礼を善く行う」とすることとする。前者は死者本人にとって、病気や老衰といった自然の摂理で亡くなる死を善しとすることであり、後者は遺族にとって死者をいかに扱うかということである。また、死ぬ場所を重視し(「落葉帰根」「寿終正寝」)、「故郷」や「家」のような、その個人と密接な関係性の強い場所で死を迎えることが大事であると理解しているとする [鍾2019: 59-60]。

第二に、安全で、住み慣れた昔のままの故郷珠山村があること。珠山は国家公園法によって民国以来の閩南様式建造物が並ぶ景観が整備されて残

(6) 鍾によれば、台湾における終末期医療に関する「安寧緩和医療法」(2000)に続く「患者自主権利法」(2016)の成立については、その背景に「善終」の概念の変遷があるとする [鍾2019: 58-68]。

されており、無秩序な近代化や観光開発はなされていない。また、景観を保つための清掃美化活動も、従来から宗族組織を中心に行われており、現在もそのまま継続されている。

第三に、珠山は薛氏宗族の村で、高齢者には宗族意識が強く維持されており、いわゆる地域基盤がしっかりしている、そのため宗親會を中心とした精神的な地域ケアが可能であること。また、日常的な信仰の対象である大道宮會は、実質的には宗親會メンバーが運営しているが、廟會には村外に住む珠山出身者や県内の保生大帝信仰者も多く参加し、村への求心力となっている。

第四に、高齢者は、基本的に経済的自立が可能であること。65歳以上になると毎月平均3千円の年金があり、貯金や子供達の仕送り、頂きもので暮らしていけるという。例えば食費は月に平均5千~1万元かかるが、本来農民なので野菜を自家栽培しており、米や麺を購入すれば十分だという。以上によれば、珠山の高齢者が自立するには、本人の健康や経済条件以外に、故郷のもつ地域力、珠山の場合は宗親會や大道宮會等の力が大きな鍵であることがわかる。

2. 「嫁」からみた家族介護

介護側の実態は、一般に、息子が経済面を負担し、嫁である息子の妻が実際の介護労働を担う。80歳代の女性によれば、珠山村では僑郷時代の嫁の役割は極めて過酷であったという。夫が南洋に出稼ぎに出た後、留守家族は舅姑と嫁、子供で構成されたため、嫁は家事や育児だけではなく、生産労働と現金収入を得るための労働の中心的働き手であり、さらに舅姑に仕え、介護することは当然の務めであった。当時の若い男性にとっても、結婚は跡継ぎを残し、父母を介護する女性を家に迎えることであった。

しかし1970、80年代以降、村の実質的な家族形態は大きく変わった。進学や就職で青壮年が都市部に移って村に戻らないことが一般的となり、息子一家と親の同居は激減し、村には親世代以上が残され、高齢者夫婦のみの二人世帯、あるいは高齢者のみの一人暮らしが増加した。息子の嫁は、多くが都市で核家族を構成して暮らし、村での舅姑と同居することはなくなり、その役割は変化した。

次の80歳代、70歳代、60歳代の女性は、2016年11月と2017年12月のインタビュー時に、自分たちの家族介護経験をつぎのように語った。

李JL (87歳1930年生) は、兄弟姉妹はなく、7歳の時に父が出稼ぎ先のフィリピンで殺されたため、母が農業をし、自分も手助けをしながら小学校を卒業した。村に国軍が来ることになったので、母は急いで結婚相手を見つけ、婚約などの過程も簡単にすまして18歳で結婚した。当時の嫁の条件は健康で働き者、夫の親によく仕えて従順であることであり、教師であった夫からは、姑とは争わず、実の母と思って仕えるようにといわれた。家計は姑が管理したので夫の収入もみな姑に渡し、家事も姑に学んだ。当時の主な収入は野菜と高粱を栽培して兵士や高粱酒工場に売って得、主な支出は教育費、祖先祭祀用の経費、冠婚葬祭時の交際費であった。家計の管理は姑が老いてから引きつぎ、姑の介護は1970年代に亡くなるまで続けた。いろいろなことがあったが、夫の死後も健康に暮らしている。長男の嫁とはあわなかったため、現在は長男の息子である孫と同居しており、県城に住む娘たちが毎日昼食の材料をもって様子を見に来てくれ、昼食を一緒にとる。夕食は孫ととる。

翁LM (82歳1935年生) は、盤山村出身、国民小学校卒、夫は教師、夫の収入だけでは生活できなかったので、高粱を栽培して酒工場に売り、現金収入を得、米と交換した。店を開いて野菜や肉を売り、1992年に夫が亡くなるまで続けた。17歳(1952)で嫁いだ時に姑(当時58歳)と2人の祖母(80、85歳)がいて、最初から同居だった。結婚して2日目の朝から、祖母と姑の三人それぞれに洗顔用の湯とお茶を用意して部屋の入口に立ち、起きてくるのを待った。3人が亡くなるまで仕え、介護をしたが、とても辛かった。四男三女。現在は一人暮らし。野菜は自分の畑でつくり、週の初めに皆と一緒に街へ買い物に行く。

許YX (62歳1956生) は、後湖村出身、小学校中退、父は漁師で7人兄弟の長女だったため結婚が遅れ、27歳(1989年)で結婚。舅姑(94歳と91歳)と結婚以来ずっと同居している。両親とも歩行が困難で、姑は認知症もあり、介護はたいへんである。夫は台湾で働いているが、3人の子供はみな台湾の大学を卒業後に金門に帰ってきた。長男は役場、長女は香腸工場、次男は高粱酒工場で働く。

黄XY（45歳1973年生）は、高校卒業後、台北の電機メーカーで働いていた時に夫と知り合って結婚。2007年に親の面倒をみるために夫の故郷である珠村に一家で移住、舅たちがいた家屋に住み、舅姑は旧小学校の小講堂を村から借りて住んでいる。毎週1回、一緒に食事をする。

以上の80歳代から60歳代までの女性は、1940年代から80年代までに島内の他村から嫁いできた。結婚は、同時に、舅姑との同居と将来の介護を意味していた。老親の介護は息子の嫁が行うべき当然のことと考えられていたからである。しかし1990年代以降の結婚は、1970年代以降に都市部へ移動した若者たちが、都市で就職して出会い、結婚した2人の生活であった。農村出身の黄XYも、1990年代に事例4の薛DMと台北で出会って結婚し、舅姑の将来の介護のために県城に転職した夫に従って珠山村に戻ったが、舅姑とは同居していない。両親は、息子に旧屋を譲って別居した。両親は当然自立した生活ができると考えており、息子は近居から始めて、将来の家族介護に備えている。

黄XYの毎日は、従来の嫁とは全く異なる。6:30に起床して朝食を作って洗濯、子供を起こして、村内には小学校がないため、7:30に県城の小学校まで車で送る。11:00までに家事全般を済ませ、家庭菜園をする。12:00に昼食（麺）をすませ、村内の女性たちとお茶をして過ごす。17:00過ぎに子供を迎えにいく。夕食は夫が仕事帰りに買ってきた魚や肉を調理して作り、一家で食べる。9時頃就寝。これは、子供をもつ都市の専業主婦とほぼ同じである。

珠山では、親が老いたら兄弟の誰かが同居するという父系の家族介護が原則であり、現在もその考え方は根強い。許YXのように、90歳を超えて要介護となった高齢者に対しては、息子夫婦が同居して老老介護を行う。まだ健康な80代に対しても、李JLのように、息子の誰かあるいはその孫息子が同居する。同居ができない場合は、子供の誰かが車で30分ほどの県城に住んで日常的に通うという近居介護を行う。近居介護も不孝ではないという認識である。しかし、実際の日常的なケアは誰が担うかという点では、近年、大きく変化している。従来は「嫁」が同居して担ってきた日常的ケアを、近居型になった場合は、事例7のように、實の娘が主に担う傾向が明らかである。娘たちは食材や日用品をもってくるので、日常的な

経済支援も行っている。

四、地域ケアと宋親會・大道宮會・発展協会

松岡[2019: 76-79]によれば、珠山村落には主な住民組織が3つある。①金門縣薛氏宗親會（以下、宗親會）およびその基金會、②金門縣金城鎮大道宮管理委員會（以下、大道宮委員會）、③金門縣金城鎮珠山社区發展協會（以下、發展協會）である。このうち①は宗族組織、②は廟會活動、③は主に村内の文化活動を行う公的機関であるが、幹部はみな宗親會のほぼ同じメンバーが兼任しており、実質的には薛DM董事長が中心となって活動する[表1]。なお、①②が男性構成員のみであるのに対して、③には多くの女性や村外居住者も参加している。村民間に宗族意識に基づく強い連帯感があることは、諸活動を行う場合の大きな強みとなっている。

[表1] 珠山村落の主要な組織

	宗親會	基金會	發展協會	大道宮管理委員會
任期	3年	3年	3年	4年
成員	薛德民（理事長） 薛金滿・薛永妥 薛明遠・薛承煒 薛承時・薛明盛 薛祖明・薛承敏 薛永僑・薛留芳 薛海南・薛芳萬 薛永喜・薛德成 （以上理事） 薛永順（常務理事） 薛承助（顧問）	薛德民（董事長） 薛承琛・薛承敏 薛永妥・薛祖明 薛承煒・薛金萬 （以上董事） 薛永順（監察人）	薛祖耀（理事長） 薛明遠・薛少騰 薛俊毅・薛永為 陳書毅・薛国鋒 （以上理事） 薛金萬（常務監事） 薛永妥・薛明盛（監事）	薛承煒（主任委員） 薛永妥（副主委） 薛明遠・薛祖凡 薛国鋒・張永為 薛俊毅・薛德民 薛金萬・薛少騰 薛自新・薛祖耀 （以上委員） 林芳旋（監事主席） 蘇永喜・蘇祖森 （監事）
会務	薛少騰（總幹事） 黃惠玲（會計） 劉永書（出納） 薛明遠（總務）	薛少騰（總幹事） 薛德強（幹事） 薛永妥（會計） 黃惠玲（出納） 薛明遠（總務）	薛德民（總幹事） 劉永書（出納） 黃惠玲（出納）	薛德民（總幹事） 薛承煒（總務） 劉永書（會計） 黃惠玲（出納）

出所：薛德民ら編輯『薛氏宗親會106年度實錄』（2017年 2頁）より筆者作成。

このうち①は薛氏の戸主を成員とし、活動内容は、12月冬至會と4月清明節での祖先祭祀、族譜編纂である。家族が結婚や成人、戸主の継承を行った時には、冬至會で必ず報告して献金し（結婚は4500元、成人は1000元）、成員の承認を受けなければならない。2017年には、台湾本島や中国大陆の「中華薛氏」代表団（山西、厦門、内蒙古、広西、江蘇等）が珠山を来訪し、薛氏ネットワークの交流も盛んである。近年は、村外居住者の清明節参加が減り財源不足であるが、宗族意識なお村民間の強い紐帯である。

②の廟會は、年々盛行している。村の内外に居住する地元民だけではなく、保生大帝信仰の金門県内や大陸からも信徒が集まり、献金収入は宗親會や発展協會の予算の7倍余に達する。農曆3月15日の保生大帝生誕日は数千人規模の廟會であり、2017年11月2日には「世界保生大帝廟宇聯合總會籌備參香」が行われた。管理委員会は毎月1、15日に三牲や酒を奉納する。村人は毎日拌みにいき、男性高齢者はここが日々の集会場である。

③の社區發展協會は、廟會以外の日常的な催事や近年、政府が力を入れ始めた高齢者に対する地域ケアを行う。發展協會は、活動拠点を珠山社區活動中心とし、財政基盤は県政府の補助や珠山村の民宿からの献金による。運営は、理事長がもと宗親會董事長で、県文化局に勤めていた薛ZY（74歳）で、会務は次男で宗親會董事長の薛DMらがあたる。活動内容は大きくA、Bの二タイプに分けられる。A型は、歳時や娯楽、環境改善、他団体との交流などの村民全体を対象とした文化活動で、B型は、高齢者ケアを目的としたデイサービスの設置と高齢者学習活動である。楽齡学習活動⁽⁷⁾には、YMC（金門縣基督教女青年會）の協力を得た「珠山社區活動中心課程」と金城鎮楽齡学習中心主催の「楽齡学習保命防跌及馬賽磚杯墊DIY」がある。なおデイケア施設設置の目的は、単に高齢者のためだけではなく、帰郷を希望する若者のために雇用機会を増やすことにあるとする。

『薛氏宗親會106年度実録』によれば2016末~17年の主な活動は、次のようである。

A型には、歳時、娯楽、衛生、地域ケア、交流（社会貢献）がある。具

(7) 台湾における高齢者教育は「高齢者教育実施計画」（1989）、「高齢者教育政策白書」（2006）、「老人福利的修法」（2007）がだされ、2008年から楽齡学習中心が小学校や図書館、民間組織に設置されるようになった[新保2015：8-10]。

体的には、①歳時：聖誕節舞會（2016年12月25日）、元宵節の乞龜・湯圓作り（2月7-9日、伝統菓子を女性高齢者が指導して作り、大道宮廟に供えて共食）、東宮拜埔（9月18日）、②娯楽：金瑞龍号初航海厦門一日ツアー（10月1日）、「土豆音楽祭」（10月7-10日）、「金門自造、聚落復興」をスローガンとして故郷に戻った「金門青年団隊」が中心となって外部音楽家を招き、地元民は出店）、重陽節泰山詣出（10月29日）、③衛生：村内大掃除（5月27日）、④交流：金門大学都景系学生訪問（4月30日）、金沙國小兒童訪問（5月2日）である。

Bの高齢者型には、まず学習活動として、珠山社区活動中心課程の「手繪紅包袋及手工饅頭」（2016年12月24日）、「併布」（3月24日）、「客家文化教学」（5月27日）、「纏饒胸花」（6月24日）、「手工耳環」（7月8日）があり、金城鎮楽齡学習中心主催の「楽齡学習保命防跌及馬賽磚杯墊DIY」がある。内容が女性向きで趣味や手芸等が多いのは、参加者の多くが高齢女性であることによる。また、対象は健康な高齢者であり、いわゆる要介助や要介護の高齢者を対象としたものではない。

地域ケアに関するものは、屏東・台東の楽齡拠点訪問（10月1日）、「長照拠点」設計検討会（11月4日、活動センター2階に設置予定のデイケア施設について）、太陽光発電式街燈のケアセンター駐車場への設置などが行われたが、地域ケアはまだ設計の段階である。確かに、村ではこれは喫緊の問題ではない。要介護者とみられるのは90歳以上の1名のみで、自宅で嫁の介護をうけており、90歳未満の高齢者はなお自活可能であるうえに、家族がすでに帰村あるいは孫との同居などの手段を講じている。ただし長寿化による要介護者予備軍の増加は、本村でも地域ケアの進展が急がなければならないことを示唆している。

地域ケア普及の遅れは、政府による政策に原因があることはすでに指摘されている。莊秀美ら[2018]によれば、台湾では、地域密着型福祉が1990年代初期から導入され、2016年5月の政権交代で「長期介護十か年計画2.0」の施工が宣言され、「ABC計画」で「地域包括ケア」の方向が明示された。ABCとは、地域ケアのレベルを3段階にわけたもので、Aは地域包括型で郷鎮市単位ごとに1か所、Bは複合型で中学校通学区域ごとに1か所、Cは地元街角型で3つの村里区域ごとに1か所設置する。珠山村の場合はCで、

初級介護予防サービスと介護サービス（短時間或いは短期宿泊サービスや食事サービス等）を提供するとある。しかし、このABC計画は目標、対象、範囲が不明であり、推進方法の混乱、財源、人力などの環境条件の不備、政府や民間団体の位置づけ、相互関係の不明など様々な問題が指摘されており、短期的には、その実現の可能性は厳しいとされる[荘ら2018：61－69]。日本における地域包括ケアシステム⁽⁸⁾が、少子高齢化の深刻な地方において、高齢者を地域づくりの担い手と位置づけて地域の再生や地域づくりが進められている状況とは異なっている。

おわりに

珠山では、子世代の青壮年の多くが都市部に居住しているため、実質的には、高齢者の一人暮らしや夫婦のみの世帯が少なくない。本稿では、村に残る高齢の親世代と都市で働く子世代との間にどのようなネットワークが紡がれているのか、親世代はどのような生き方を望んでいるのか、子世代は親世代の介護のためにどのような選択をするのか、宗親會と大道宮會を中心とした地域社会は、超高齢社会の珠山においてどのような機能を果たしているのか、親世代と子世代、地域社会の関係について、以下の点を明らかにした。

第一に、親世代と子世代は強い家族意識によって結ばれ、いつかは息子或いはその息子である孫が同居して世話をするという意識が強い。また、両者とも親が故郷で最後を迎える「善終」を希望している。第二に、珠山の高齢者は、三代同居を理想とするものの、実際は難しいことを理解しており、むしろ、村で自立的な生活を続けることを望んでいる。自立とは、健康面、日常生活面、経済面、精神面におけるそれである。このうち男性高齢者の場合は、宗親會と大道宮廟の運営の主体者であることが精神的な自立の支えになっている。第三に、女性高齢者の場合、一人暮らしは伝統的な「三従」（夫、舅姑、子）からの解放であり、自立を意味する。彼女

(8) 地域の実情に応じて、高齢者が、可能な限り、住み慣れた地域でその有する能力に応じて自立した日常生活を営むことができるよう、医療、介護、介護予防、住まいおよび自立した日常生活の支援が包括的に確保される体制をいう[二瓶・増子2017：169]。

たちは1950年代前期までに生まれ、故郷を離れて珠山に嫁ぎ、珠山を「善終」の故郷とする。結婚は舅姑と同居して介護の役目を担うことであり、僑郷時代は子育てをしながら「寡婦的状态」で生きた。家事や子育てだけではなく、一人の労働者として生産活動の中心であり、現金収入をもたらす者で、家族の実質的な中心でもあった。彼女たちは、もともと自立的にならざるをえない境遇にあり、一人暮らしになって変わるのとは、はじめて、家族のためではなく自分のために生きることであった。環境的には孤独ではない。村には自由に往来のできる昔からの知り合いがいて、発展協会主催の学習会にもよく参加している。

第四に、親の面倒をみるのは息子であるという考え方は根強いが、近年の息子は、親世代との同居ではなく、近居型の介護を選択している。帰村した場合は、旧屋の構造が三世代同居に適さないという理由で、親と息子は村内の近い距離で別居する。意識の上では、車で半時間以内にある県城も近居の範囲内であり、子世代にとっても周囲にとっても近居は「不孝」ではない。実際に親の日常的な生活を支えるのは息子の「嫁」であるが、近年の「嫁」にとって、結婚は必ずしも舅姑との同居を意味しない。近居は、嫁姑関係の安定のためにも賢明な方法である。第五に、嫁いだ娘が、実家の親の介護に積極的に関わっている。親に対する日常的な手助けは、嫁よりも實の娘になっている。これは、親世代と子世代の関係が、親と息子、嫁、娘という個人対個人の関係になっていることを示すものであろう。

第五に、政府主導の地域ケアは、発展協会を拠点としてようやく始まったばかりであるが、珠山の発展協会は、宗親會と大道宮管理委員会とほぼ同じメンバーによって構成されており、実質的には強い地域基盤に支えられた運営が期待される。将来、要介護者の増加が家族介護の限界を超えることが予測されるため、発展協会が予定するデイケア施設や食事サービスなどの介護の社会化は早急に取り組むべき課題である。またこれは、高齢者への援助だけではなく、帰村を望む青年に仕事の機会を提供するものとされている。これは、景観の維持を第一とする本村においても可能な「高齢者支援の産業化」の方向であり、人口の減少が続く本村にとって新たな可能性を示すものではないだろうか。

以上のように、従来の家族介護は、三世代同居を前提とした、親と息子

という、財産分与を含む父系の「家」の継続に関わる問題であった。しかし、近年は、息子世代の同居が難しくなり、親世代の独居あるいは高齢者夫婦のみという世帯が増えている。その結果、近居介護が増えており、介護については親と息子に加えて、「嫁」のかわりに娘が実質的な世話をを行い、大きな役割を果たすようになっている。このような子世代それぞれの個人と親との間に紡がれた介護関係の空間的な広がりとは、「家」の継承に付随する扶養責任の分担を意味しており、それはやがて明確に財産分与にも反映されていくものと思われる。

参考文献

- 安里和晃（2013）「グローバルなケアの供給体制と家族」『社会学評論』64(4)625－648
- 安達正嗣（2010）「高齢期家族研究のパースペクティブ再考－「家族」から「家庭」へ」『家族社会学研究』第22巻第1号12－21
- 植野弘子（2000）「第三章 家族における男性と女性」『台湾間民族の姻戚』風響社 91-154
- 川島真（2011）「金門島の概況」「僑郷としての金門－歴史的背景」『地域研究特集1 金門島研究－その動向と可能性』昭和堂 016-019、043-061
- 金門薛氏宗親會彙編（2017）『薛氏宗親會106年度實錄』
- 謝翠玉総編輯（2008）「珠山聚落」『金門縣鄉土DNA－人文歴史、自然生態與保育』台北：国家文化總會 087－130
- 鐘宜鏘（2019）「台湾における週末期医療の法と倫理－「患者自主権利法」の成立と「善終」概念の変遷」『死生学・応用倫理研究』24号58－69
- 新保敦子（2015）「超高齢社会における社会的孤立の克服と高齢者学習に関する考察」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』第25号1－13
- 莊秀美・洪春旬（2018）「台湾における地域包括ケアシステム構築に向けた課題分析－「ABC」計画を中心に－」『西日本社会学会年報』No16 61－71
- 鄭經文・張鳴珊（2019）「老年大学與科技新知学習」『科際整合月刊』4：9 43－47
- 二瓶さやか・増子正（2017）「地域包括ケアシステムの推進と共同募金の役割」『十文字学園女子大学紀要』48巻1号167－176
- 松岡正子（2019）「宗族社会における女性の役割－金門縣珠山集落を事例として」

『愛知大学国際問題研究所紀要』第153号71－86

李文題 (2018) 「高齢学習課程之探討－以台中市學樂齡學習中心為例」『台灣教育評論月刊』7:5 279－284

楊培珊 (2019) 「我国面对人口與家庭結構變遷下的高齡社會議題與解方」『国土及公共治理』第七卷第一期24－31

横田祥子 (2011) 「台湾漢族の高齡者の扶養形態-「輪食」から「輪照」へ」『貿易風-中部大学国際関係学部論集』第6号62-76

劉正・齊力 (2019) 「台湾高齡者的居住狀況與機構照顧的需求趨勢」『国土及公共治理』第七卷第一期70－79

摘要

金门珠山村是薛氏一族的单姓村，距今已有近650年的历史，现在也持有强烈的宗族连带感并传承着闽南文化。1980年代以来，由于子世代的青壮年多数不得不离家移居外地城市就学就业，家中只剩下高龄独居老人和夫妻两口。本稿通过分析守在村里的高龄亲世代与生活工作在都市的子世代的关系与选择，并考察宗亲会和大道宫会为中心的地域社会的机能，明确出以下几项珠山高龄社会的特征。

第一，亲世代和子世代仍有着强烈的家族传统观念，其儿子或儿孙还是持有与老人一起居住并赡养老人的意识。另外两代人都希望老人能在自己的故乡“善终”。第二，珠山的高龄老人对理想的三世同堂很难实现的此现实也能理解。倒不如说渴望在村中维持着自立的生活，就是指在健康方面，日常生活和经济上及精神方面的生活方式。在这样的自立生活中男性高龄者积极参与宗亲会和大道宫庙会的活动做为其精神支柱。对独居的女性老人来说自立是从传动的“三从”（未嫁从父，出嫁从夫，夫死从子）中得以解放。对她们来说婚姻就是与婆公同居并有赡养责任。与此同时她们还要承担做家务带孩子，成为劳动力赚钱等各种的责任。这样的生活也是从前的一种自立。但现在她们的独居生活方式是他们第一次拥有自己的时间，可以独自一人的享受。

第三，近些年的儿女不选择与父母同居，而是就近居住以便照顾老人。即使回到村里也不同居，在比较近的地方居住。开车半个小时以内的县城也被认为可选为能赡养老人居住的范围。并且近年的媳妇未必都与婆公一起居住，选择近邻的地方居住才是比较聪明的选择。

第四，出嫁的女儿也积极参与自己父母的赡养。在日常生活上帮忙，比起儿媳妇女儿会承担的多像一些。这样的关系与其说是亲世代和子世代的关系，不如说是父母和儿女，媳妇，之间的个人关系的维持。

第五，政府主导的地域性护理服务。以发展协会为起逐渐开始运作。珠山的发展协会的成员主要来自于宗亲会和大道宫管理委员会，所以有很强的地域基盘，运营上得以较高的期待。将来预测需要介护帮助服务的人会超出其能承担的极限，对发展协会来说日常护理中心和提供饮食服务的完善建设是当下急剧的课题。另外不光是单一性的援助服务，对有望回村的年轻人提供就业机会也很重要。这样的“高龄者支援产业”的形成，对人口减少的本村来说是一项新的发展方向。